

# アンの夢の家

モンゴメリ・村岡花子訳





ゆめ いえ  
アンの夢の家

—第六赤毛のアン—

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 赤 113 F

昭和三十三年八月二十五日 発行  
昭和五十年十月三十日 三十刷

訳者 村岡花子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七一  
電話 業務部(〇三)(二六六)五一  
編集部(〇三)(二六六)五四  
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⑦ 印刷・株式会社三秀舎 製本・加藤製本株式会社

© Midori Muraoka 1958 Printed in Japan

新 潮 文 庫

# アンの夢の家

—第六赤毛のアン—

モンゴメリ  
村岡花子訳



---

新 潮 社 販



## 目次

|     |                       |     |
|-----|-----------------------|-----|
| 第一章 | グリーン・ゲイブルスの屋根部屋で…………… | 九   |
| 第二章 | 夢の 家……………             | 一六  |
| 第三章 | 夢にかこまれた国……………         | 二四  |
| 第四章 | グリーン・ゲイブルス初の花嫁……………   | 三三  |
| 第五章 | 新しいわが家へ……………          | 四二  |
| 第六章 | ジ ム 船 長……………          | 四九  |
| 第七章 | 教師の花嫁……………            | 五五  |
| 第八章 | ミス・コーネリアの訪問……………      | 六三  |
| 第九章 | フォア・ウインズ灯台……………       | 七〇  |
| 第十章 | レスリー・ムア……………          | 一〇三 |

|       |                  |    |
|-------|------------------|----|
| 第十一章  | レスリーの身の上……………    | 二三 |
| 第十二章  | レスリーの訪問……………     | 二六 |
| 第十三章  | 霧の夜……………         | 二三 |
| 第十四章  | 十一月の日々……………      | 二六 |
| 第十五章  | 港のクリスマス……………     | 二四 |
| 第十六章  | 灯台の大晦日……………      | 二五 |
| 第十七章  | フォア・ウインズ港の冬…………… | 二六 |
| 第十八章  | 春のおとずれ……………      | 二七 |
| 第十九章  | あかつきとたそがれ……………   | 二八 |
| 第二十章  | ジム船長のロマンス……………   | 二九 |
| 第二十一章 | 沈黙のせきを破って……………   | 二九 |
| 第二十二章 | ミス・コーネリアの手腕…………… | 二四 |

|       |                   |     |
|-------|-------------------|-----|
| 第二十三章 | オーエン・フォードきたる…………… | 二三  |
| 第二十四章 | ジム船長の生活手帳……………    | 二九  |
| 第二十五章 | オーエンの創作活動……………    | 三〇  |
| 第二十六章 | オーエンの告白……………      | 三四  |
| 第二十七章 | 砂浜の夜……………         | 三四  |
| 第二十八章 | 世間話……………          | 三五  |
| 第二十九章 | 医師ギルバート……………      | 三六  |
| 第三十章  | レスリーの決意……………      | 三七〇 |
| 第三十一章 | 解放……………           | 二七九 |
| 第三十二章 | ミス・コーネリアの意見……………  | 二八五 |
| 第三十三章 | レスリー帰る……………       | 二九一 |
| 第三十四章 | 夢の船港へ着く……………      | 二九七 |

|       |               |     |
|-------|---------------|-----|
| 第三十五章 | 港の町の政治……………   | 三〇五 |
| 第三十六章 | よみがえる愛情……………  | 三二五 |
| 第三十七章 | 意外なニュース……………  | 三三六 |
| 第三十八章 | 赤いばら……………     | 三三三 |
| 第三十九章 | ジム船長の出発……………  | 三四〇 |
| 第四十章  | 夢の家とのわかれ…………… | 三四五 |

|           |     |
|-----------|-----|
| あとがき…………… | 三五七 |
|-----------|-----|

# アンの夢の家

—第六赤毛のアン—

我々の親しい者たちは  
あちこちにやしろを築いた、  
そこで我々の知っている神々に祈り、  
そしてささやかな美しい家に住む

ルーバート・ブルーク

訳註

ルーバート・ブルーク (Rupert Brooke 一八八七—

一九一五) はイギリスの詩人、第一次世界大戦に出征、

ギリシャで戦病死。死後一躍詩壇にみとめられた。

## 第一章 グリーン・ゲイブルスの屋根部屋で

「有難いことに、習うのも教えるのも、幾何学とはもうこれでえん切りだわ」

アン・シャーリーはやや怨みのこもった口調で、かなりぼろぼろになった幾何の教科書を大型の本箱に投げ込み、威勢よく蓋を閉めるとその上に座り、ダイアナ・ライトを夜明けの空のような灰色の眼で眺めた。二人はグリーン・ゲイブルスの屋根部屋で向き合っていた。

屋根部屋にはおさだまりのことだが、この屋根部屋も薄暗くて、さまざまな連想をひそめた、たのしい場所であった。アンが座っているそばの窓からは、かくわしい匂いをたたえた、快い八月の午後の日光にあたためられた空気が流れ込み、外ではポプラの枝が風にサワサワと音をたてて揺れていた。その向うには『恋人の小径』が人の心を魅するように曲りくねって奥の森につづき、いまなお赤いみのりをふんだんにつけている古いリンゴ林が見えた。そして青い南の空には雲の大山脈がすべての上にそびえていた。もう一方の窓からは白い波頭の青い海が遙かに見えた——美しいセント・ローレンス湾である。この湾に寶石のように浮かんではいるのがアベゲイト（土人がこの島につけていた名）である。このやわらかな美しいインデアンふうの名前が、プリンス・エドワード島という散文的な名称にとってかわられてから久しくたっていた。

ダイアナ・ライトはこの前私たちが彼女を見た時から三年たっており、いくらか主婦らしい落着きを増していた。然し、アン・シャーリーと二人でオーチャード・スロープの庭で永遠の友情を誓った昔とかわらず眼は黒く輝き、頬は赤く、えくぼは人を惹きつけた。腕に抱いた黒い捲毛の小さな子供は眠っていた。この子が『小さなアン・コーデリア』としてアヴォンリー界隈に知られてから幸福な二年をすごしている。アヴォンリーの人々はどうしてダイアナがこの子をアンと名付けたかは勿論知っていたが、然し、コーデリアには面喰らった。嫁入って来たライト家にも実家のバリー家にもコーデリアと呼ばれた女性はい人もいなかったからである。ハーモン・アンドリュース夫人はこの名前はダイアナがなにか三文小説の中から見つけたものに相違ない、フレッドも考えのない男だ、よくもそんな名前をつけさせたものと言った。然し、ダイアナとアンは顔を見合わせて微笑した。二人とも小さなアン・コーデリアがどうしてその名前を貰ったかを承知していたからである。

「あんたは元から幾何が嫌いだったわね」ダイアナは回顧的な微笑をうかべた。「とにかく、教えずに元くてよくなってあんたもさぞうれいことだろうと思うわ」

「あら、あたし教えるのは前から好きだったのよ。幾何が別だけれどね。サマーサイド中学での三年はたのしかったわ。家へ帰って来た時、ハーモン・アンドリュースの小母さんから、中学校の先生をしているのに較べたら、結婚生活はあんたの思ったほど気に入らないでしょうって言われたわ。たしかにハーモンの奥さんは、知らない困難に飛込むより現在しよっている苦勞のほうがましだというハムレット(シェクスピアの悲劇の主人公)の意見に賛成してるのよ」

昔とかわらず朗らかで人を魅するようなアンの笑いにやさしさと円熟味が加わり、屋根部屋にひびきわたった。階下の台所であんずのジャムをつくっていたマリラはそれを聞いてほほんだ。やがて溜息をつき、これからさきの年月にはあのかわい笑い声がグリーン・ゲイブルスにひびき渡ることはまれになるだろうと思った。アンがギルバート・ブライスと結婚するということはマリラのこれまでの生涯での最大の幸福ではあるが、然し、喜びには必ずかなしみ影が付きまとうものである。サマーサイドでの三年間、アンは休暇には勿論、週末などにたびたび帰って来たが、今から後はせいぜい年二回の訪問しか望めないであろう。

「ハーモンさんの言うことなんか気にかけることはないわよ」と、ダイアナは主婦生活四年の貫録を示して慰めた。「勿論、結婚生活にはいいこともあれば悪いこともあるわ。万事が必ずうまくいくものと考えてはならないのよ。でもね、アン、結婚生活は幸福なものだということは確かよ、自分に合った人と結婚すればね」

アンは微笑を噛み殺した。ダイアナが経験者ぶるのが以前からおかしくてならなかった。

「あたしだって結婚してから四年もたったらあんな様子をすることも知れないわ。でも、あたしにはユーモアがあるから、あんなにはならないですむにちがいない」

と、アンは考えた。

「住む場所はきまってる？」

ダイアナは小さなアン・コーデリアを母親独特のしぐさで抱き締めたが、それを見るとアンはいつもながら心を打たれ、甘い、言うに言われぬ夢と希望と、そして、純粹の喜びと共に、何と

も説明のつかない淡い苦痛がはじまった思いで胸が一杯になった。

「きまったのよ。それを話したかったので今日来てほしいって電話をしたわけなの。そういえば、アヴォンリーに電話があるなんてほんとうと思えないわね。この懐かしい、のんびりした昔ふうの土地に、電話なんかあんまり当世ふうで、近代的で、似合わない感じだわ」

「そのことではアヴォンリー生活改善会にお礼を言わなくてはね。改善会がこの件をとり上げて実行にうつさなかったら電話なんかひけなかったでしょうからね。どんな会でも気がくじてしまふほどの物言いをつけられたんだけれど、改善会では頑張りとおしたのよ。あの会を創めたあなたは素晴らしいことをしたのよ、アン。あの集まりでは愉快だったじゃないの！ あの青い公会堂と、ジャドソン・パーカーが塀いっぱい葉の広告を出そうとした時のことを忘れられて？」

「あたし、電話の件では改善会に心から感謝できるかどうか分らないわ。たしかにこんな便利なものはないことよ——あたしたちがローソクの光で合図し合うことを発明したのよりもずっと便利よ！ それに、リンダの小母さんの言う通り、『アヴォンリーも行列におくれてはなりませんからね、まったくのところ』ですものね。でもあたしはハリソンさんが気の利いたことを言いたがる時のきまり文句じゃないけれど、アヴォンリーが『近代的不便』でそこなわれないほうがいいのという気がするのよ。いつまでもあの懐しい元のままにしておきたいの。そんなことは馬鹿氣にいるわ——それにセンチメンタルでもあり——不可能でもあるわ。だからあたしは早速、賢く、実際のな、話の分る人間になることにするわ。電話はハリソンさんもかぶとをぬいで言ってる通り『素晴らしい代物』よ——おそらく物好きな人たち六人ぐらいに盗み聴きされているとは分

っけていてもね」

「それがなにより困るのよ」ダイアナは溜息をついた。「だれかに電話をかけるたんびに受話器を外す音が聞こえて来るのでいやになるわ。ハーモン・アンドリュースの小母さんは電話が鳴るたびに聞きながら食事に関心を配れるために、自分のところの電話は台所にとりつけるようにって言い張ったそうよ。今日あんたからかかった時、パイ家のあの奇妙な時計が鳴る音がはっきり聞こえたわよ。だからジョーシーかガーディが聞いていたに違いないわ」

「ああ、だからあんたは『グリーン・ゲイブルスでは新しい時計を買ったのね』と言ったわけね。あたしなんのことか分らなかったわ。あんたがそう言うとすぐにガチャッといまいました。音がしたけれど、パイ家で受話器をかける音だったのよ。まあパイ家のことなんか気にすることはないわ。リンダの小母さんじゃないけれど、『過去においても未来においても世々限りなくパイ家はつねにパイ家なり、アーメン』よ。さあ、もっと愉快な話をしたいわ。あたしの新家庭の場所はずっと決まったのよ」

「おお、アン、どこなの？　ここから近いところだといいいけれど」

「近くはないのよ。それが欠点なの。ギルバートはフォア・ウインズ(Four Winds)港に住むことにしたのよ——ここから六十哩はなれているの」

「六十哩ですって？　六百哩もおなじことだわ」と、ダイアナは溜息をついた。「今のあたしはシヤロットタウンより遠くへは家を離れられないんですもの」

「ぜひフォア・ウインズに来なくちゃだめだよ。鳥じゅうで一ばん美しい港よ。その突端にグレ

ン・セント・メアリ (Glen St. Mary) とかう小さな村があつて、そこでデビッド・ブライス先生が五十年も開業しているの。ほら、ドクター・ブライスはギルバートの大伯父さんでしょう？ 引退してギルバートがあとを引き継ぐことになったのよ。でも、ドクター・ブライスは家はそのまま住まっているの、あたしたちは自分の小さな住宅を見つけないといけないのよ。どんな家だか、また実際にどこにあるのかまだ分らないけれど、あたしの想像ではすっかり家具もとのつた小さな夢の家が出来ているのよ——かわいい、たのしい、スペインのお城よ」

「新婚旅行にはどこへ行くの？」

「どこへも行かないの。そんなにびっくりしないでよ、ダイアナ。そんな顔を見るとハーモン・アンドリュースの小母さんを思い出すじゃないの。小母さんはきつと、新婚旅行に行く力のない者は行かないのが上分別だと、思いやり深い態度で言うに違いないわよ。そう言っておいてからジェーンの時にはヨーロッパへ行つたと言ひ出すのよ。あたしは自分の蜜月をフォア・ウインズのあたしの大事な夢の家ですごしたいの」

「それから付添い娘<sup>ブライズメイド</sup>もなしにしたんですって？」

「適当なひとがないんですもの。あんたもファイルもブリシラもジェーンも結婚ではあたしを出し抜いたし、ステラはバンクーパーで教えているし。あたしにはほかに『腹心の友』はいないんですもの。『腹心』ではない付添い娘<sup>ブライズメイド</sup>なんか要らないわ」

「でも、ヴェイルはかぶるでしょう？」

と、ダイアナは心配そうに訊いた。

「かぶりますとも。ヴェイルがなかったら花嫁のような気がしないわ。マッシューがあたしをグリーン・ゲイブルスへ連れて来たあの夕方、あたしはあんまり不器量だからだれもお嫁に欲しいと言う人はないと思う——外国へ行く宣教師は別かも知れないけれどってマッシューに話したのを憶えているわ。あの頃あたしは外国へ行く宣教師は食人種の中へ命がけで入って行く娘を望むのなら、器量のことをあんなにやかましく言ってはいられないだろうと考えていたのよ。プリシラが結婚した宣教師を見せたかったわ。あたしたちが前から自分たちの結婚相手として空想していた人物に負けない好男子で測り知れぬ深味があったことよ。あれほど身づくろいのいい人は見たことがないし、プリシラの『この世のものとも思われない、金色の美しさ』に夢中になっていたわよ。でも、勿論、日本には食人種なんかいないけど」

「とにかくあんたの花嫁衣裳は夢のように美しいわ」ダイアナはうつとりと吐息をついた。「あれを着たらあんたはまったく女王様のようによ——背が高くてすらっとしているんですもの。どうしてそんなにいつもほっそりしていられるの、アン？ わたしは前にもまして肥って来たのよ——もうじきウェイストが全然なくなってしまうわ」

「肥るも痩せるも宿命のように思えるわ。とにかくハーモン・アンドリュースの小母さんがあたしに言ったようなことはあんたに向っては言えないわよ。『あらまあ、アン、相変らず骨と皮ばかりね』ですって。『ほっそり』と言えはまったくロマンチックに聞こえるけれど、『骨と皮ばかり』じゃ別の味わいがあるわ」

「ハーモンさんの小母さんはあんたの婚礼衣裳のことを話していたわよ。ジェーンのとおなじく